平成10・11年度コロキウム発表要旨

平成10年度第4回2月10日

演題：社会変動に伴う我が国のスポーツシステムの今日的課題

演者：高橋　義雄（体育科学部）

〈はじめに〉

イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズによれば、人間の「行為」は、「規則」や「資源」といった行為者を拘束しつつ能力を付与する「構造」によって時間と空間のなかにつなぎとめられている。そして「行為」と「構造」は、どちらかいっぽうが他方をつくり出すような一方向的なものではなく、「構造が行為の媒介手段となり、同時に行為の結果になる」という関係にある。スポーツという人間の行為もこのように考えれば、現在ある「構造」を媒介手段として成立し、スポーツを行為する結果、構造自体を更新していることになる。その結果極端な言い方をすれば、スポーツシステムは、構造がスポーツの行為を変化させ、その変化したスポーツの行為が新たに構造を更新するといった絶え間ない変容の過程に晒されていると言える。

〈急激な構造の変化〉

近代の科学技術の発達により、社会はますます大きな構造の変化の局面にある。アンソニー・ギデンズは、特定地域の社会形態や出来事と、遠隔の地域の社会形態や出来事との相互の結びつきが拡張する近代におけるグローバル化を「時空間の拡大化」という言葉で表現している。そもそも近代スポーツと呼ばれる、西欧由来のスポーツの世界への伝播はこうした文脈のもと解釈されるが、近年のさらなる情報技術の発達により、ある場所で生じるスポーツの事象がはるか遠く離れたところで生じるスポーツに関係する事象を方向づけるような、世界規模の社会関係が強まっている。こうしたグローバル化によって安定していた構造が不安定になる。このことは日本においても例外ではなく、既存の価値体系の正当性が問われ社会的不確実性が増大し、スポーツの行為もその正当性が問われることになる。さらには、世界標準や国際基準といった新しい価値体系が作られ、ローカルな基準は追いやられることになる。

〈スポーツの性質〉

急激な構造変化にさらされた社会においてスポーツという行為は、どんな役割を果たすのだろうか。そのときにスポーツの性質を考えることは有効だろう。まずスポーツは、結果の予測不可能性によって成立する。つまり結果がわかるゲームは明らかに八百長であり、参加者から確実なものを求めようとする努力を奪ってしまう。スポーツはある決まったルール内において、良い結果を得るために最大限努力するという近代資本主義社会の縮図ともいえる。次にスポーツは、グローバル化によって誰もが理解可能なコミュニケーション力が高い身体活動であること、そしてそれゆえに人がスポーツを通じて自己主張なり、シンボリックな意味を擬装することだろう。また身体を運動させることが生命活動に有益であることが生理学的に言われている。ここから考えられるのは私論であるが、スポーツは不確実性の高い社会にあって、その不確実性を減衰する行為であり、安定的に生きようとする生命の身近な表現形態、つまり人類の知恵ではないだろうか。

〈日本のスポーツを取り巻く今日的課題〉

日本にあった価値体系の崩壊とライフスタイルの変化は、自己の価値観に照らし合わせて異常であると感じさせる社会現象を生じさせる。少子高齢化や学校制度の見直し、地域社会（コミュニティ）の再生など、社会の変化に対応し、社会の安定を目指すベクトルが作用している。そうした社会環境においては、従来の構造で成立していたスポーツシステムの変更も余儀なくされている。スポーツシステムを担ってきた行政、経済、政治のレベルにおいて、前述したスポーツの性質を理解し、さらに社会環境の変化をとりこんだ形でのスポーツシステムの見直しが求められている。